

今日から始めよう、私たちにできること。

新しい年、新しい時をいただきました。今年もまた、神さまは私たちに期待してくださっています。与えられた「時」を、神さまが働かれる「時」にしていくように…と。

今年の小教区創立50周年はすばらしい

恵みの中で祝うことができました。これからは、私たち一人ひとりが、個人として、また仲間として人々に神さまからの恵みを分かち合っていきたいものです。「受けるより、与える人は幸い」とは聖書の言葉です。右の絵は九十九さんの今年の作品です。《エリカ 奇跡のいのち》という題です。この絵は同じ題の絵本の話をもとに描かれたものです。聖堂の後の部屋に展示しています。《エリカ奇跡のいのち》

アウシュビッツに連れられていく母親が汽車から自分の子どもをほうり投げました。第2次世界大戦中のドイツで奇跡的に生きのびた、ひとりの女性の物語です。お母さんは、自分は「死」に向かいながら、子どもを「生」に向かって投げたのです。絵の右端にはアウシュビッツに向かう汽車が描かれています。「死」に向かう黒い貨車。その貨車の天井ちかくにある小さな窓から…母親は自分の赤ん坊をほうり投げたのです。母親の大きな手は

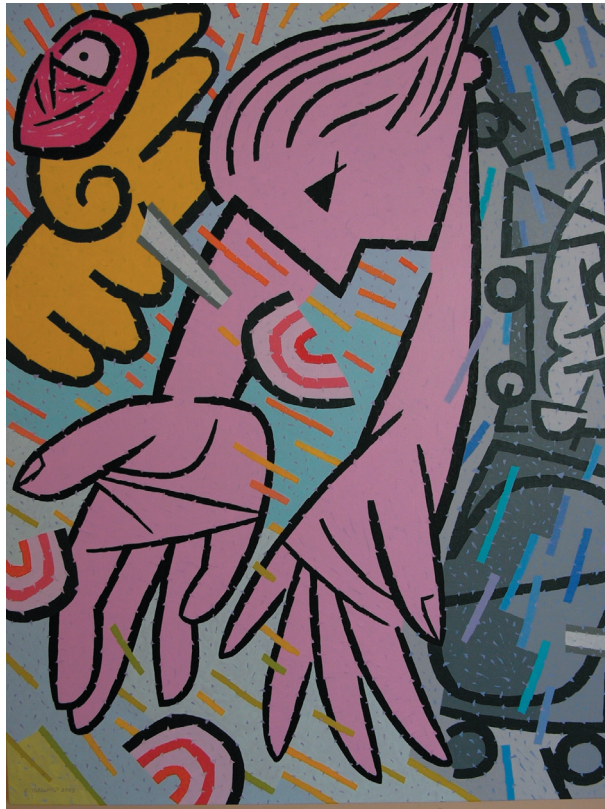
下を向いています。放り出された赤ん坊は天使によって受け止められ、聖霊の風の中で天に向かって大きく舞い上がっているようです。右は「死」の世界。左はいのちの息が吹きまくる「生」の世界です。母親の目は悲し

みをたたえています。同時に一途の希望を感じさせます。

いのち…何のものにも変えがたい尊いもの。今、その尊厳が大きく揺らいでいます。いのちが粗末に扱われる社会は、その全体が確実に「死」に向かっています。あたかもアウシュビッツに向かう汽車に乗っているかのようです。今こそ私たちは、この汽車を止め、その汽車から降り、いのちの青草と聖霊の風が吹く野原に解放されなければなりません。…この絵は50周年の記念品として私から

作：九十九伸一

行橋小教区の皆さんへの贈り物とします…



ミンダナオに行ってきました

創立50周年のお祝いの後、一週間ほど、フィリピンのミンダナオ島に行ってきました。式典の時、皆さんに紹介した松居友さんが働いておられるところです。松居さんは2004年の秋、豊津町に講演に来られたのですが、その講演会に行橋カトリック幼稚園の職員が参加しており、その職員を通して知り合った方です。何冊か著書がありますが、

その中の一冊「絵本は愛の体験です。」を読み、深い感動を覚えました。それからメールのやりとりをしながら親交を深め、2005年の春に幼稚園で創立50周年の記念講演をしていたわけです。当日は参加者が



とっても明るい子どもたちだけど…以前は…

少なくとも残念な思いをしましたが…。ミンダナオはフィリピンの南の大きな島の名前。首都のマニラから飛行機で約2時間かけてダバオという大きな町に行きます。そこからさらに車で3時間、キ

ダパワンという町はずれに《ミンダナオ子ども図書館》があります。図書館といえば、町にある図書館を思い浮かべますが、児童施設と言ったほうが、想像しやすいと思います。僻地や家庭（親）に問題があり、学校に行けない子ども



キダパワンの司教さんと

たちの世話をしているわけです。今は30人ほどの子どもたちが松居さんを含むスタッフやボランティアと一緒に生活しています。この子どもたちは学校に通って勉強しながら、週末には僻地やスラム街を訪ねて、絵本の読み聞かせをしています。そして、訪ねた村に学校に行けない子どもや病気の子どもたちがいれば、その子どもたちが教育を受けたり、治療を受けたりできるように手助けをします。今回、私も《ミンダナオ子ども図書館》の活動に参加させてもらいました。いくつ

かの村を訪ねましたが、横の写真は、今回訪ねたある村の子どもたちの様子です。とっても明るい子どもたちです。私たちが

行くドオーっと車に駆け寄って来ました。でも、二年前はそうではなかったそうです。人々から見捨てられ、自分たちも希望を失った村でした。その村から奨学生が出、治療を受けて子どもが元気になって、希望が生まれてきました。「一人の子どもが救われることで、村全体が平和になる」ということを実感しました。

私たちにできること…

私たちにできること…いろんなことがあります。どうでしょう。ミンダナオの子どもたちを支えてくださいませんか？ 私たちも決して豊かではないでしょう。でも、個人で、また、ご家族で子どもさんと一緒に支えてくださいませんか？ ぜひ「ミンダナオの風」をお読みになり、一人の子どもを支えてくださいませんか？ 医療活動も支えてください。どうか…お願いいたします。